Prof. A. Hillの細胞生物学的日常

Episode 3

月 日，学生達と話していて合コンの話題になり，うっかり合ハイと言ってしまい皆にキョトンとされる。あ，私も経験がある，というあなた，昭和30年代前半の生まれでしょう。かってそういうものがあった。今はない。何故かは知らねど。若すぎて，もしくは年寄り過ぎて合ハイを知らない人のために解説すると，合コンが合同コンパの略であるのに対し，合ハイは合同ハイキングの略である。さらに言えば合同とは，メントラ班と核ダイナミクス班が一緒にシンポジウムをすることではなく，お互いに未知の大学生（希に大学院生）男子と大学生女子との意図的かつ集団的な出会いを指す（boys meet girls？）。「合同ではいきんぐう？なんすかそれ？ハンカチ落としでもするんすかあ？」と馬鹿にした顔で言うそこの若い奴，驚くなよ，ハンカチ落としを，本当にするのだ（「まじっすかああ!?」）。嗚呼…（この“ああ”には様々な想いが込められているが，主として恥ずかしさに身をよじるような気持ちと思って頂いて構わない）。関西方面ならば例えば万博記念公園の芝生上に白昼，ぞろぞろと，一見して冴えない某国立大学理系男子学生とこちらは少し華やかなれど今は絶滅してしまった真面目なファッションの某女子短期大学生がほぼ同数あわせて10数名車座となり，弁当を食べ（女子がキリスト教系や仏教系の場合，アガペや大慈悲の精神で手作り弁当を持ってきてくれることがある），特に他にすることもないのでハンカチ落としをするのである。妙に真剣になってしまうところがもの哀しい。ええと，ハンカチ落としも知らないと言うチョー若い世代のために説明すると…もういいや。面倒くさい。しかしこの実に健全な風習が絶えたのは，アトランティス沈没と同じくらい謎である。合コンなどという，酒の勢いで何とかしようというせこさはここには微塵もない。さんさんと降り注ぐ太陽光のもとハンカチ落としで恋愛感情を高めなければならないという絶望的な状況に敢然と立ち向かう青春群像。麗しいではないか（無いかな…）。この奇習は当時猖獗を極めていたので，現在素知らぬ顔で教授などと威張っている面々にも身に覚えがある者は多かろう。探せば合ハイ記念写真が出てくるに違いない。教授を失脚させたければ，不正経理など見つけずとも合ハイ写真一枚でOK。恥ずかしさのあまり失踪するはずである。噂では，あろうことか合ハイの相手と後に結婚してしまった者もいるという（それもなんと最初の合ハイで）。その恐ろしい過去を抹殺するために，結婚式にその合ハイ参加者は呼ばなかったし，さらに口封じのためひとりひとりの暗殺を計画しているらしい。

思えば我が世代の歩んできた道には，現れては消えていった奇妙な事物がごろごろしている。小学校時代の給食の脱脂粉乳。学生諸君，君らがブロットのブッロキングに使うのと全く同じスキムミルクを我々は飲んでいたのだぞ。あの言語を絶する不味い脱脂粉乳溶液（湯で溶かしてあったが，冷めてぬるくなったときのまずさときたら…）をべこべこのアルマイト（しらんだろうなあ，今の連中は。あれのせいでアルツハイマーになったら浮かばれない）の容器で呑む辛さ。味をごまかすために時々コーヒー風味にしてあるのだが，それが不味さを倍増させていた…　しかも当時は，給食を残すなど言語道断，食べ終わるまで先生が横で見張っていた。脱脂粉乳を残した者は昼休み無しで飲み終わるまで座っていないといけない。私の隣の＊＊ちゃんはどうしても飲めなくて，飲むふりをしてセーターの袖に吐きだして染みこませていた。だから午後，＊＊ちゃん自身が脱脂粉乳臭くて閉口した。かくして我々は，人生が不条理に充ち満ちたハードボイルドなものであることを早くから学んだのであった。我が世代に優れた研究者が多いのは，給食の脱脂粉乳のせいで中枢の常識的思考などを司る部分がブロックされたせいではないかと密かに睨んでいる。なお，この苦行を戦後日本に導入したのがあのトム・ラパポートのお父さんであるという驚愕の裏日本史については，いつか改めて触れたい。さてその後も，我らが子供時代はトッラク野郎みたいな電飾がいっぱい付いたゴージャス自転車が流行ったり，万博で月の石を見るのに3時間並んだり（今思えば，あんな石ころになぜ夢中だったのだろう…），次々と進化の袋小路みたいな奇っ怪な物や事がめまぐるしく登場した（このあたりのことは，串間努著「まぼろし小学校―昭和B級文化の記録」に詳しい。今チューネンの皆さん，感涙間違いなしです）。どの世代にも世代特有の思い出は当然あるが，戦後の混乱が終わってから生まれ，日本の高度成長と時を同じくして育った我々は，一方「政治の季節」には完璧に「遅れてきた青年」となり，そのせいかその人生を特徴づけるのは，一言で言えば何だかよくわからんトホホなものばかり。しかし，良くも悪くもその中で（たぶん）多くを学んできたのだ。

こんな話ばかりでは我が世代が上や下から舐められる恐れがある（やーい，やーい，合ハイ合ハイ等とはやし立てたりしてはいけません）ので，もう少し格調高い話題に移る。4月7日は

アトムバースデイボックスに入っていた原画（の複製）。
手塚治虫先生は，私の大学の大先輩である。またアトムの主題歌は，私のmost favoriteな詩人・谷川俊太郎が作詞した。

何の日かご存じだろうか。お釈迦様の誕生日ではなく，鉄腕アトムの誕生日である。しかも2003年4月7日。この遙か未来に生まれる（私達が子供の頃，2003年は車輪のない自動車（？）が空を飛び交う気が遠くなるような遙かな未来だったのだ）アトムは，もちろん幅広い世代に知られた我が国が誇るヒーローであるが，我が世代は全盛期に多感な少年少女であったため（1963年よりテレビアニメ開始，64年よりカッパコミックス「鉄腕アトム」刊行開始）極めて多大な影響を受けた。少なくとも私は熱狂的なアトムファンで「ラララ科学の子」であった。カッパコミックスの発売日が待ち遠しく，あの子供向けにしては差別問題や生命倫理などのシリアスな話題を扱いどことなく哀愁も漂う漫画だけではなく，必ず巻末にあった科学読み物～火星に生命はいるか？などなど～をむさぼり読み絶対科学者になって科学省に入ると誓う日々だった。2003年になっても科学省はないが（アトムでは科学省は研究機関でもあるようだった），一応曲がりなりにも（“まがいもの”と読み間違えないこと）科学者にはなれたので，刷り込みは恐ろしいというか，単に根が単純なのだとも言えるがともかくアトムには感謝している。昨年はそのアトムの誕生年だというので色々便乗商法が流行って，お金を巻き上げられたお人好しも多かったものと思われる。いくらノスタルジーがあるとは言え，沈着冷静なストレイカー司令官（これも世代踏み絵でっせ。反応した人は，お仲間や）の異名をとる私には笑止千万，買ったのは「鉄腕アトムバースデイボックス・ネットのみで予約販売・14,286円＋消費税」だけだ。これがまた当時のおまけのシールやら紙製の付録やら手塚治虫先生直筆原稿の複製やら，要するに原価100分の1くらいのものがでっかい紙の箱に入って送られてくるというはっきりいって詐欺まがいの品で，ところがそれを広げているうちに遠い日，自分の勉強机の裏に張ったミーニャ中尉のシールのことなどを思い出し不覚にも落涙してしまった…　いやそれにしても全巻揃っていたカッパコミックス，母親がちり紙交換に出してしまわなければ今頃100万円くらいの値が付いているのに…
いかんいかん，折角純真だった（極めて短い）時期に戻っていたのに，どうも擦れっ枯らしになってしまった。アトムの話を始めるときりがないので，このあたりにしておこう。ともかく我々は，アトムから科学の光と陰を学ぶと同時に，脱脂粉乳に人の世の無情を見，長じては合ハイによって心身を鍛えてきた。それらの要素がないまぜとなって（あるいはこんがらがって）今日の我らがある。過去を美化しだしたらテロメアが短くなるより明白な老化の徴候であることは百も承知であるが，でも我々が通ってきたそれぞれのあの頃のトホホさ加減，間延び具合は貴重かも知れない。子供があっさり殺される，予想もしなかったこの21世紀初頭の殺伐さと比べたら…

便乗商法のひとつ。意味も意図も不明。
企業の宣伝文句「アトムがブラジャーになるとは手塚治虫さんにも想像出来なかった!?　来る2003年4月7日，「鉄腕アトム」の誕生日を祝し手塚プロダクション公認特製ブラジャーを製作通称『ト＊＊プ@胸（アッと・ムネ）ブラ』登場　アトムに描かれている「科学が生んだ夢の21世紀」と，現実に訪れた21世紀。どこが予想通りで，どこが違うのか。みんなが考えるきっかけになれば…と，国民的ヒーローをモチーフにしたブラジャーを開発してみました!!」

心やさしいアトムが好きでなかったと今なら言えるような
気がする　永田和宏著 歌集「風位」より

＊＊＊付記：メントラ班計画研究代表者10名中4名が同い年，2名がその一年違い，つまり過半数が昭和33年前後の生まれなので，計画班内部に総括班とは別に脱脂粉乳友の会を作ろうという動きがあるという…ことはない。